

十四歳の君へ わたしたちの授業

昨年度のものになりますが、宮崎日日新聞に掲載された作品を紹介します。

中二国語科通信

第3号
令和4年4月8日
国語科旧2年担当
堀之内・日高・奥池

〈1月1日掲載〉

動物学者 今泉忠明〔理科〕

「自分は自分 違い認めよう」

・「残念」でもいい

・疑問を持つのが大事

・そのまま大丈夫



二組 小笠原珠了

私にも動物と同じように残念な部分がたくさんある。しかし、その部分があるから今の私がいると思うと、残念な部分があってもいい。もちろん直したい性格や習慣はたくさんある。しかし、人間や動物が進化してきたように、私たち一人一人も日々進化することを楽しんでいけばよい。



〈2月12日掲載〉

脚本家 渡辺あや〔社会〕

「役立つのは好感度より知恵」

・社会科はすぐに役立つ

・急に才能が開くことがある

・中学時代はつらくて当たり前



三組 福山結月

今まで、人生の前半の成績や行動で、その人の一生がどのようになるか定まると思っていたが、この文を読み、後半に花開く大器晩成型の人生があることを知った。生まれてたった十数年であきらめず、今後の人生を全力で冒険し、全力で楽しんでいきたい。



いつも行く直売所にも春が来てわらびと筍並べられたる

三月十六日、第二十六回卒業証書授与式が挙行されました。思い出の詰まった体育館での式典は、厳格な中にもあたたかさがあり、心に残るものとなりました。本来ならば在校生も参列して巣立ちを祝うのですが、感染防止のためかありませんでした。そんな中、マーチング隊が初舞台とは思えないほど素晴らしい演技を披露してくれました。また、生徒会長の新村くんが在校生代表として式典に参加し、送辞を読んでもくれました。その全文を掲載します。

送辞

空を飛び交う小鳥のさえずり。暖かい春の光。長い冬の眠りからようやく目覚めた草木たち。そのすべてが先輩方の株立ちを祝っているようです。三年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同心よりお祝い申し上げます。この宮崎第一中学校で多くのことを学び、多くのことを成し遂げてきた眼差しは凛として、その背中はいつにもまして大きく見えます。私は、そんな先輩方を誇らしく思う一方で、一抹の寂しさを感じずにはいられません。それほど先輩方の存在は、私たちにとても大きなものでした。



新型コロナウイルスの感染防止が私たちの日常となったこの二年間。先輩方と共に学校行事に取り組む機会は減りましたが、それでも先輩方は、沢山の教えを、思い出を、私たちにくださいました。体育祭や文化祭は、先輩方が一年生の時に経験したものは大きく異なり、何かと困惑されたことと思います。しかし、どんな条件の中でもベストを尽くす態度や、みんな楽しんでしようとする前向きな姿勢に、いつも圧倒され、先輩方の大きさを思い知らされました。

振り返れば、先輩方は私たちにとって常に「こうなりたい」という目標でした。いつも優しく、頼りになる存在で、様々な場面で私たち後輩の手本として過ごされました。特に印象に残っているのは合唱コンクールです。クラスが一致団結し、妥協を許さない真剣さで練習を重ねる姿に敬服しました。そして、一位、二位、三位を独占する。ただただカッコいいと思ったことを覚えていてます。先輩方と過ごした二年間はすべて忘れられません。私たちも、先輩方のような強い一体感で、一中の未来を築く存在となるべく努力していくことを、在校生を代表して、ここにお約束いたします。

今、先輩方は胸に夢と希望を抱いて、次のステップに進もうとされています。何も行動せずに上手いこととはなく、不満ばかり言って幸せになる人も、言い訳ばかり言って成功する人もいません。先輩方らしく、常に前を向いて歩み続けてください。そして、たまにでいいので、私たち後輩にエールを贈ってください。「あきらめるな。まだまだこれからだろ一中生！」と。

最後となりましたが、ご卒業される先輩方の、より一層のご活躍とご健康をお祈りして、送辞といたします。

令和四年 三月十六日

在校生代表

新村拓未

昨年度発行しきれなかった最終号です。今年度も皆さんの作品を楽しみにしています！